

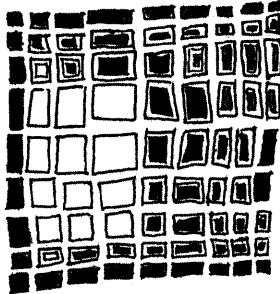
若いお母さんたちへ

最新 東京子育て事情——私の場合——

はるにれの会

鈴木 貴志子

わが家は夫婦と子供一人（碧^{みどり}・5歳）の核家族であり、二年前に中央区月島に引っ越してきた。月島は、流行のことばでいえばウォーターフロント。隅田川ぞいの倉庫跡地利用の高層マンションに住んでいる（ナウいてしま？）でも向かいは大正時代に建てられた長屋が軒をつらね、せんべい屋やもんじや焼き屋なら捨てるほどあるけれど、気のきいたパン屋がないのが悩みの種で、フランスパンを買いに銀座三越まで走ることになる。訪ねてきた人はレトロでないと大喜びしてくれるが……。共



働き、保育園、一人っ子、そしてお入学（有名付属小学校が通学範囲内にあるため、ああ恥ずかしい……）と都会での子育ての問題を全部かかえこんでいる。

自己紹介を兼ねて申し上げると、私は「ウチは²キャラ・カッブルならぬ^{1.5}キャリアである」と主張している。私にとって仕事をするのは改めて考えるまでもなく当たり前のことだけれど、夫も妻も一人前の仕事をしていたら、子育てのところにシワ寄せがくるのは目に見えている。子育ての大部分を人手にゆだねた上で、さらに家事と仕事をこなすスーパー・ワーマンでなくてはならぬ。それをからやかにこなしている友人も、フーフーいいながらのりこえている友人もいらないわけではないけれど、私は荷が重い。私はボーッとした怠け者だし、夫とも濃密につきあいたいし（何しろ夫は女子大でも教えている。私があまり放つておくと、倫理感に欠けた女子大生がお世話をやきたがるのじやないかと心配で、心配で……）、それに何よりも子供とつきあうのはおもしろい（仕事よりおもしろい……こともある。ただしフルタ

イムでとなるとおもしろくない）。というわけで夫と妻、ふたり合わせて^{1.5}キャリアくらいにしておけば、余裕のある方が子育てに時間を使うことができる。今ところは夫が^{1.2}で（大学教師プラス物書き）、私が^{0.3}（母親プラス二流コピーライター）。夫はいつの日か教師をやめて、子育てと物書きだけをやりたいと言っているから、私が華々しくキャリアウーマンとして復帰する日がこないとも限らない（そうなつたら夫が^{0.5}で、私が^{1.0}になる、ふ、ふ、ふ）。この希望があるため夫は「ウチは^{1.5}キャリア」説に反対はしていないが、これは夫の説ではない。彼は単に「ウチの中がホコリだらけで、タンスの中に真夏はセーター、真冬は麻のシャツがあるという事態を何とかしてほしい」と言っているだけだ。「何とかできたらいいな」と思ってはいて、いつの日か家中が夢のようにかたづくことを夢みている。

さて結婚当初からのわが家のキャリア事情と子育て事情を表にしてみよう。

年代 子ども

妻

夫

1982
(結婚)
る)

1983

(新居を妻の実家に近い市川に決め

・化粧品会社のP・R誌編集『花椿』

・翻訳家。大学院課程在学中。彼が訳

・愛していた)。ただし、結婚と共

していいる知的な本はあまり収入には

に、それまでの深夜残業あたり前とい

う働き方をやめ、六時には終業と決め

ならない。お金を稼ぐ必要にかられ

る。他編集部員はそうではないので、だ

ると、S・Fや、ロマンス物を訳

んだんはみ出していく。子どもの文化

と関わる仕事をしようと、編集部をや

める決心をした後、妊娠となる。

しばらく絶版になつていましたがこ

・会社を辞めフリーのエディターとな

る。まわりには出産退職とみなされる

から、買って読んでね。☆

が、臨月まで働く。

・七月十三日、パリ祭の前日に女の
子が生まれる。

・子どもが一歳になるまで、子育てには
ば専念。子育ての息抜きに夫の翻訳を
手伝う。

・『子どもは小さな哲学者』(思索
社)『小さな反逆者』(福音館)と子
どもに閲した本の翻訳を出版(☆い
い本です。買ってね☆)。収入は予

備校教師。

1986

1985

1984

- ・ちょうど満一歳になつた頃、公園に子どもを連れてくる保育ママさんと知りあいになる。彼女の人生を見込んで、子どもを預けることにする。最初の数か月は午前中のみ。次に昼ご飯まで、次に四時頃までと、ゆっくりと保育時間を増やしてもらつた。
- ・ほぼ二歳になつたところでフルタイムで保育ママさんに預ける。
- ・母親が忙しくなったことに歩調をあわせて(?)保育ママ嫌いとなる。預けようとすると、ジンマシンが出る程大泣きして嫌がる。無理をして預けもしたが、ついにあきらめて、母方の祖母と、ベビー・シッターの交代で、家庭内で保育をする。四月に保育園に入園する間もあった。
- ・1985年1月から、広告代理店に勤める友人から声がかかって、前とは別の化粧品会社を担当するエディター＆コピーライターとして就職する。週に三日出社、十時から五時までと考えられない程恵まれた条件。以前のキャリアが一〇〇パーセント役に立つた。
- ・大学の非常勤講師となる。大学、予備校、翻訳、執筆と多忙になる。
- ・フリーのエディターとして、スローペースで仕事を再開する。我が家に赤ちゃんがいたから『わたしの赤ちゃん』（主婦の友社）に、記事を書く。仕事はおもしろかった。こういう仕事はかつて築いたコネクションから来る。持つべきものは友。

るまでの数か月間、大変苦労した。

・四月に保育園入園。一ヶ月位で慣

れて、何とか通うようになる。

(八月に月島に引っ越す。これまでのアパートが手狭になつたため、通勤に便利でしかも広いところを探す。となると東京の城南、城西地域はあきらめることになる。今のマンションのあるところは、もと倉庫街というのを下町というのもおもしろいと思つた。狂乱物価の直前に、親の助けも得て、購入に踏み切る。)

・新しい保育園には順調に慣れる。

・保育園には慣れたが、決して喜んで通うことではない。「行きたくない」というのをだましだまし通つた。

・幼稚園に変わることを検討しばじめる。

夫の熱烈な希望で超有名付属幼稚園を受験してみるが、準備不足で当然落ちた。お入学のためには、それなりの訓練が必要なことがわかつた。

・勤めて二年たらずで広告代理店を辞めることにする。恵まれた条件だったが、それにみあう程のめざましい仕事ができなかつたため。コピーライターとしての力不足を痛感する。

・フリーのエディター＆コピーライターに戻る。雑誌の仕事は取材にかかる時間が多いため、主にコピーの仕事が多い。子供服メーカーのパンフレットなど、地味なところで楽しんで仕事をしている。営業努力を全くせず、細々と

・大学の常勤講師となる。収入が保証され、ボーナスも入るので有り難い。大学が埼玉県にあり、通勤に時間がかかるため超多忙となる。現在ますます多忙だが、原稿を書く仕事は自宅で行われる。そのため“折りあらば”家事、育児に狩り出される。妻子の無理解を嘆きつつ、家庭とのバランスは案外とれている。

・保育園をやめ、近くの幼稚園に変わる。同じマンションから通っている子どもが多いため、帰宅後も友だちと遊ぶことが多い。幼稚園もたいして好きではないが、お昼寝がないというのでまあまあ気にいっている。

個人的な家族史につきあわせてしまつたが、表を見ると終始一貫していることが二つある。ひとつはウチの子どもはいつでもどこでも預けられるのが嫌いだということ。保育ママも保育園も幼稚園も、善意の保育者に恵まれていても関わらず、喜んで出かけたのはほんの数えるほどしかない。友だちと遊ぶのが嫌いなわけではなく、保育園に行っていた時でさえ、帰ってくると同じマンションの友だちと遊びたがったが、あくまで自分のペースで、自分の友だちと遊ぶのが好きなのである。夜べッドに入つてから眠りにつくまでの三十分間（赤ん坊のときからひどく寝つきの悪い子供だった）、『ドラエも

した仕事ぶりなので、収入は代理店勤務の半分程度。家計に占める私の収入の割合はぐんと減つた。今後の方向をどこにしほるか模索中（思えば、私はいつもいつも模索中だが）。

ん』と『ど根性がえる』と看護婦さん（大のお医者さんごっこ好き）について『考え方』をするのが大好きとのことだから、つまりはそういう子どもなのだと思う。もうひとつ、夫は、妻や子の妨害にも負けず、大学院生から大学講師へと地位を固め、本を読み本を書いている。ただし毎月誰かがお金を惠んでくれるのなら、働きたくないというのが口ぐせなので、ときどき私たちは「二人の役割を交換する」相談をする（今のところ、実りのない会話だが、実は神経細やかな夫は、家事がすばらしくうまい、ムムム……）

このふたつの『終始一貫』の中であちらこちらへとさ

まよっているのが私である。よくいえば私には柔軟性があり、柔軟な働きぶりが許されるだけの「能力（脳力？）」みたいなものもあったと思う。そしてなげなしの能力以上にあったのがまわりの協力である。引っ越す前は近くに住んでいた母の、現在はご近所の主婦の皆さんのおかげで、何とか仕事を続けている。母には甘えもあつて赤ん坊をぱいぱい預けていたから、私は兄弟の鼻づまみものだった。子供を幼稚園に通わせている今では、同じ幼稚園のやさしい『お母様たち』の「仕事のときはいつでも預かってあげるわ」という親切に頼つていれる。心から感謝していて、ご近所には足を向けて寝られない（ご近所は四方にあるから、私は丸まって寝つている）。

さて最後に、保育園から幼稚園への転園のことを書いておきたい。せっかく曲がりなりにも通っていた保育園をやめたのにはいくつかの理由がある。ひとつは子供が保育園を嫌いだつたこと（嫌いならやめちまえ、というのが夫の方針である。娘が登校拒否をするようなら、学

校になど行く必要がない、職を辞して自分が教えると公言している。社会に不適応なら南の島へ行って、二人で暮らすのだそうだ。私は東京に単身赴任して、お金を送る係が割り当てられている）。そして夫が子供をエスカラーター式の私立の学校に入れたがっていること。娘が生まれたときから「シラユリ」や「セイシン」の名前を口に出し、私の「イ、インテリはそんなことあんまり言わないもんだよ」という弱々しい抗議には耳もかさない。公立の小学校にはジャージーの上下を着た教師や乱暴な男の子がいて娘をなぐると信じている（その折りは十倍にしてなぐりかえすといっているが、恐ろしいことに、夫の先輩は子供の担任をなぐった上、ブールにつきおとした。私は夫が獄につながれるのは見たくない）。

受験勉強が知性を失わせるというのも持論で、これには私も納得する。夫は受験に勝ち抜き、東大に入ったおかげで知性を失つたらしく、私は無名の私立大に入ったおかげで、大変まつとうに元気に育つているもの。

こうして私は子供と夫の迫力に圧され、また私自身も

フリーになつたことだし、子供につきあうことを優先しようという気になつた。児童文学はもちろん、子供のテレビ、おもちゃ、幼児教育と、子供をとりまく文化は、私の興味の的である。そして当の子供自身への興味……。

娘が通つていた保育園への不満もあつた。保育園には連絡帳もなれば、父母会もなく、散歩に出かけることもめつたになく、一年間に一回も歌を歌うことも、絵を描くこともなかつた。といつても園に熱意がないわけではなく、園長も担任も暖かく、子供への愛情にあふれてゐるのだが……。散歩や課題がないのは、安全への配慮と子供に押しつけることを嫌つてのことだったようだが、やはり知的な刺激はあつた方がよいと思う。下町の保育園で、お母ちゃんたちは自営業、パート、内職が多く、地域のコミュニティの中で働いていたから、父母会がなくとも、コミュニケーションが存在していたのかもしれない。残念ながら私はいささか孤独だつた。

土地が高価で人口の少ない中央区には、私立の幼稚園

は一園しかない。ここは自由でのんびりした保育という評判とはうらはらに、私立小学校をめざす子供が集まつている。同じマンションから十人ほど子供が通園しているため、わが娘もこの幼稚園に通わせることにしたが、ここも受験を筆頭に問題が多い。入試のための塾はもちろん、ピアノにバレエ、リトミックに水泳、英会話にお絵描きと、週におけることを五つも六つもこなしている猛児もいる。保育園も幼稚園も、"自由でのびのびした保育"をかけ、親たちも口を開けば"自由でのびのび"というのだが、"自由"も"のびのび"もめつたなどころには落ちていない。

私の摸索には、子供の教育への摸索が加わり、これまでよりいっそうあちらこちらへと動くはめになつてゐる。